

【全体概要】

本県の稲WCS用主要品種「たちすずか」は、高品質な稲WCS生産が期待できる茎葉多収タイプの品種で、畜産農家から高い評価を受けている。しかし、本品種はイネ縞葉枯病に罹病性であるため、近年、被害が増加傾向にある本病に抵抗性をもつ新品種「つきすずか」の栽培を希望する動きが出てきた。そこで、「つきすずか」の特性把握と安定栽培方法を確立し、導入を図る。

新品種・新技術等の概要

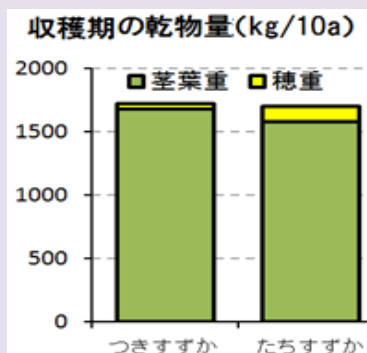
稲発酵粗飼料用稲品種「つきすずか」は農研機構西日本農業研究センターで育成され、平成28年に出願公表された。

●品種特性

出穂期は「たちすずか」並の極晩生品種で、稈長は極長く穂数は少ない茎葉型の草姿である。イネ縞葉枯病抵抗性で、黄熟期の乾物重は「たちすずか」並で、籾重割合は「たちすずか」より少ない2.8%程度である(右図)。また、黄熟期の稲体糖含有率は「たちすずか」よりやや高い。



「つきすずか」黄熟期



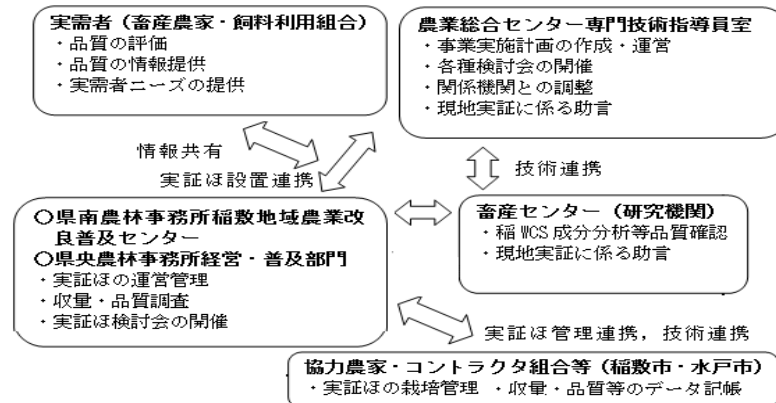
主な取組内容

- ・実証圃の設置による品種・収量特性の把握
- ・多肥栽培試験による収量向上
- ・生産者、実需者及び関係機関による現地検討会、情報交換会の開催
- ・稲WCSの品質評価
- ・栽培暦の作成および普及拡大の推進



耕種・畜産農家現地検討会

実施体制図



課題と今後の対応

●取組の実績

- ・標準施肥の実収は3.0～3.4t/10aで、「たちすずか」と同程度であった。イネ縞葉枯病の発生はなく、抵抗性の検証は出来なかったが、稲WCSの発酵品質は優れた。
- ・栽培暦(暫定版)を作成し、関係者に配布した。
栽培面積 0a(H29)→96a(H30)

●今後の展開

- ・品種の年次安定性やイネ縞葉枯病抵抗性の検証を継続する。
- ・収穫適期を検証し、栽培暦や栽培マニュアルを改定する。
- ・畜産農家からは茎葉多収型品種を用いた稲WCSが要望されており、畜産農家と連携して栽培面積拡大を進める。